

現場こそ、大学の鼓動。
日体大の「今」を知る。

大学の 現場 から

TOPIC

1

社会連携センターの 取り組み

キャンパスから社会へ

TOPIC

2

戦没オリンピックの 生きざまに迫る

戦後80年
オリンピックスポーツ文化研究所

POINT

キャンパスにとどまらず、地域社会とつながる活動を推進している社会連携センター。スポーツ活動支援やボランティア、体力測定など、多岐にわたる取り組みの数々を紹介します。

POINT

ベルリン五輪に出場後、若くして戦地に散った有本彦六。体操への情熱を燃やし、後進の育成に尽力した彼の生きざま、そして時代を超えて受け継がれるその不朽の精神に迫ります。



社会連携センターの取り組み

社会連携センターとは

社会連携センターは、大学と地域社会、自治体、学校教育現場との連携を推進しています。主な役割は、大学が有する知的・人的資源を地域や社会、学校教育現場に還元し、地域課題の解決、地域や学校教育現場の活性化に貢献することです。たとえば、公開講座の開催、学生によるボランティア

活動や地域実習の支援などが挙げられます。また、地域のニーズを学内に伝え、教育・研究と結びつける「橋渡し役」としての機能も担います。これにより、学生にとっては実践的な学びや社会貢献の機会が広がり、教職員にとっても地域と連携した新たな研究・教育の可能性が生まれます。さらに、学内

の研究支援課と連携し、産学官連携を推進することで、大学が地域に開かれた存在となることを目指します。

社会連携センター長
波多腰 克晃



■ 体育・スポーツ活動支援



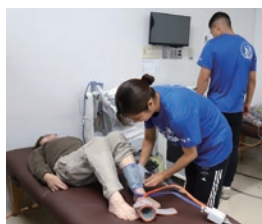
教育現場において水泳指導補助員、学習・行事支援、地域のスポーツイベントの支援、部活動支援や演技披露・講師派遣ならびに指導を行いました。これらの活動を通じて、教員・学生延べ302名を派遣しました。うち講師は、教授2名・助教1名・柔道整復師3名の計6名です。

■ 教育活動支援・ボランティア活動



教育活動支援としては、世田谷区・横浜市をはじめ、目黒区・北区教育委員会、東京学校支援機構（TEPRO）、各学校に対して宿泊を伴う引率補助や年間を通して学習支援を行いました。ボランティアとしては、地域のイベント運営補助を行い、地域の方々との交流を深めました。

■ 体力測定



地域の方々の健康寿命延伸のため、11月に世田谷・健志台両キャンパスで体力測定を開催しました。形態測定、機能測定も併せて実施しているため、現在の健康体力を知り、今後の健康・体力づくりに生かれます。40歳以上を対象に事前予約制（抽選）で行われ、計618名が参加しました。

■ 地域美化活動



岩井海岸、健志台キャンパスにて学生会学生による清掃活動を行いました。世田谷キャンパス周辺にて寮生が古着・古布回収に参加しました。グリーンヒル鶴志田西団地付近の清掃を年4回実施しました。青葉台商店会花植え活動にレスリング部が参加しました。

※令和6年度の情報です。

■ 令和7(2025)年度公開講座等情報

本学では、一般の方を対象とした公開講座を開催しています。体育・スポーツ、保健医療を中心とした内容で教育と研究の成果を地域の皆さまに広く提供いたします。最新情報や詳細は、公開講座ホームページへの掲載および公開講座お知らせメールにてお知らせいたします。皆さまのご参加をお待ちしています。

日付	講座名・講師	会場	定員
有酸素: 11/29(土) 筋トレ: 12/7(日)	トレーニングのすゝめ (有酸素運動・筋トレの基礎)	東京・世田谷キャンパス	有酸素20名 筋トレ30名
11/16(日)	歩いて健康! 元気に楽しく! 日体大ウォーキング	横浜・健志台キャンパス	30名
11/24(月)、11/29(土) 2/7(土)、2/11(水)	トランポリン教室	東京・世田谷キャンパス	各回30名
12/7(日)	日体大スポーツフェスタ2025 in 横浜・健志台キャンパス	横浜・健志台キャンパス	抽選160名
12/13(土) 2/28(土)	少林寺拳法を体験しよう!	東京・世田谷キャンパス	各回35名

Web上で機関紙
「T-Lion Voice Home」
バックナンバーを
ご覧いただけます。



戦没オリンピックの 生きざまに迫る

ベルリンオリンピックに出場し、「片手倒立の天才」と称された体操選手、有本彦六。彼は単なるアスリートにとどまらず、体操の本質を追い求め、その真の価値を教え子たちへ伝えようとした指導者でもありました。

なぜ、彼の生きざまは今もなお私たちの心を打つのでしょうか。有本の足跡をたどるとともに、彼が貫き、時代を超えて受け継がれるその信念に迫ります。



■「片手倒立の天才」・有本彦六

1915年(大正4年)に三重県熊野市で生まれた有本彦六は、中学時代から陸上競技に取り組み、日本体育会体操学校へ進学しました。体操の練習中に片手を負傷し、一時は使用不能に。しかし片手で倒立を続け、日本で初めて片手倒立を完成させました。その不屈の精神から、「片手倒立の天才」と呼ばれています。



■ベルリンオリンピックへの出場

有本は猛練習の末、1936年(昭和11年)ベルリンオリンピックの体操日本代表に選出され、団体で9位入賞を果たしました。異国の地で世界の技を目の当たりにし、大きな刺激を受けた有本は、次期東京オリンピックに向け、更なる技術向上に打ち込みました。



■日体大スワロークラブの創設

ベルリンからの帰国後、有本は体操競技の発展を願う仲間とともに「スワロークラブ(後の日体大スワロー)」を設立。戦争により東京オリンピックが中止となり、選手としての夢は途絶えましたが、指導者として後進の育成に尽力しました。



■継承される精神

アジア・太平洋戦争の激化により、有本は海軍に招集され、1945年(昭和20年)4月25日、わずか29歳で戦死しました。しかし、彼の体操への情熱は、愛弟子たちによって受け継がれ、「体操ニッポン」を築く礎となりました。

■現在の「体操競技部」

有本が唱えた「真摯に体操に向き合う姿勢」と「わさの本質を捉える主体的・自主的な練習」は、体操競技部の伝統として今も息づいています。その理念の下、これまでに多くの優秀な選手が育ち、日本の体操界を牽引する存在として活躍しています。



Researchers studying ARIMOTO Hikoroku

》有本彦六の生涯を追ったスポーツ史学者たち《

スポーツ文化学部
福井 元 准教授オリンピック
スポーツ文化研究所
関口 雄飛 助教

戦火に散った若き天才が残した光

類稀な才能と体操への熱意、そして深い人間愛を持ちながら、若くして命を落とした有本彦六。彼の生きざまから私たちは何を学ぶことができるでしょうか。

有本氏は、困難に負けない強靱な意志を持った人物でした。このことは、心臓の持病や手足の怪我を乗り越えベルリンオリンピックへの切符を掴み、チームの主力選手にまで上り詰めた事実表れています。同時に、彼は周囲の人々を心から愛していました。故郷の人々への感謝を忘れない姿勢、教え子や親友との深い絆、戦友に対する態度、そして妻ソノさんの写真を肌身離さず持ち歩いていたことから、彼の強さの根底にあった温かさをうかがい知ることができます。

有本氏の生き方は、私たちに真の価値とは何かを問いかけています。彼は地位や名声ではなく、ただひたすらに体操の本質を追い求めました。大日本体育協会（現：日本スポーツ協会）等の役職には就かず日本体育専門学校（現：日本体育大学）の助教授として後進の指導に尽力。教え子

に食事をふるまうために、ベルリンで購入した大切なカメラを何度も質に入れたそうです。また、彼は外国の技術をただ真似するのではなく、その本質を理解し、自ら考えることの重要性を説きました。戦況の悪化により東京オリンピック出場への道が閉ざされた後も、彼は誰よりも早く起きて練習を重ねるとともに、後進の育成に一層励みました。氏の親友によれば、その生きざまは、「名誉ではなく、体操競技者としての実力を追求してほしい」という無言のメッセージだったといえます。

有本氏の足跡をたどる1年半の調査・研究は、日本体育大学が歩んできた歴史を深く考える機会となりました。彼の精神は、今も私たちの心に深く刻まれ、多くの学びをもたらしています。

1年半に及ぶ調査にあたっては、特に、有本彦六氏の義娘・一美氏、有本氏の親友・松本徳一氏の御家族様、元東京新聞／中日新聞編集委員・加藤行平様、駅前・木本町まちづくり推進委員会関係者の皆様に多大なる御協力を賜りました。誠にありがとうございました。

慰霊式を行いました

戦後80年を迎えた本年度も、学内の慰霊碑前で慰霊式を行いました。学徒動員等で犠牲となった先輩方（有本彦六氏含む）を追悼し、平和の尊さを改めて胸に刻みしました。体育・スポーツ指導者という夢を志半ばで絶たれた先輩方の無念さを忘れず、参加者一同、世界平和を祈念しました。本学では、昭和33年の慰霊碑建立以来、一日も欠かさず花を供え、慰霊の心を継承しています。



戦前・戦時中・戦後まもなくの資料ご提供のお願い

現在日本体育大学では戦没同窓生名簿を制作中です。戦前・戦中・戦後まもなくの同窓生情報や資料を収集しております。ご協力をお願いいたします。

お問い合わせは
こちら▼